

# 中国古典の世界から〈道徳〉を考える

林 教子

キーワード：道徳、道徳の語誌、道徳教育、中国古典、儒家思想、老荘思想、翻訳語、明六雑誌

**【要 旨】** 2015年（平成27年）に学習指導要領を一部改訂し、従来の「道徳の時間」は「特別の教科化 道徳」（以下「道徳科」という。）として新たに位置付けられた。今後は、2018年（平成30年）に小学校、2019年（平成31年）には中学校で全面实施されることになっているのだが、特別教科化された目的は〈道徳教育の一層の充実〉にある。そこで本論文では、〈道徳教育〉の〈道徳〉とは何かについて、〈道徳〉という語の語誌研究という観点から解明し、そのことにより現代日本に求められる〈道徳教育〉の一端を明らかにしていくこととする。

まず、〈道徳〉という語の淵源を探るために、古代中国（殷王朝～後漢）の古典作品における〈道徳〉の使用例を取り上げた。中国思想の二大流派である「儒家思想」と「老荘思想」の代表的な作品である『論語』『老子』を中心に検証した結果、〈道徳〉には、儒家的な「仁義礼智」を尊重する倫理道徳と、それを批判した老子一派の「無為自然」の生き方という異なる意味用法が存在することがわかった。

次に、日本における〈道徳〉という言葉の変遷と探った。流入期に近い『続日本紀』では、単に中国古典の引用に留まっていたが、江戸期になると儒者たちが〈道徳〉という言葉を使駆して独自の道徳論を提唱するようになった。本論文では、古義派の伊藤仁斎が著した『論孟字義』の使用例を検証する。

さらに明治期には、西欧からもたらされた〈moral〉の翻訳語として〈道徳〉をあてるようになる。これにより〈道徳〉という言葉は西洋的倫理観をも内包していく。しかし、明治後期から昭和前期にかけて国民道徳を広める手段として「修身科」で用いられ、修身道徳という使い方をされる。戦後は、「修身科」の反省に基づき、民主主義教育の一環として「道徳の時間」が設置される。

以上のように、〈道徳〉の語誌を概観してみると、古代中国の思想、江戸期の儒家による道徳論、明治期に翻訳語として取り込んだ西欧的倫理観、戦後の民主主義的倫理観などの影響を受けた多様性が明確になった。その多様性ゆえに、「道徳科」の指導内容にも多角的視点が求められる。

## はじめに 一今、〈道徳〉という語を考える意義一

本論文の目的は、〈道徳〉という語の意味用法を、その淵源である中国の古典に遡って検証し、現代に至るまでの変遷過程を概観することである。この研究目的を設定した背景には、2015年（平成27年）に文部科学省が「道徳」の教科化を決定したことに伴い、〈道徳〉とは何かが改めて問われていることがある。道徳教育改革のスケジュールは以下のとおりである。

2015年（平成27年） 学校教育法施行規則及び学習指導要領の一部改正。道徳の「特別の教科化」

2016年（平成28年） 小学校「道徳科」の教科用図書検定

2018年（平成30年） 小学校全面実施・中学校「道徳科」の教科用図書検定

2019年（平成31年） 中学校全面実施

間近に迫った全面実施に向けて、学校現場だけでなく大学の教員養成課程も動き始めている。そんな中、学生から「教職の授業の課題で「道徳科」の授業計画を立てているのだが、評価規準がわからず困っている」という話を聞いた。特別の教科化にあたっては評価が必須となるのだが、文部科学省は「道徳科」の特性を踏まえ、数値による評価ではなく記述式であることを示すにとどまっている。（2016年2月現在）。

ここで、一部改正した小学校学習指導要領（平成27年3月27日公示）<sup>1</sup>では「道徳科の目標」と「道徳科の評価」をどのような記述しているかをみておきたい。※傍線は筆者による。

#### ○「道徳科」の目標

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

（「第3章 特別の教科道徳」の「第1 目標」）

#### ○「道徳科」の評価

児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすように努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

（「第3章 特別の教科道徳」の「第3 指導計画と内容の取扱い」の4）

傍線部を見ても明らかのように「道徳性」・「道徳的」が多用されている。『小学校学習指導要領解説特別の教科 道徳編』（平成27年7月 文部科学省編）では、主として学校教育の観点から教科目標や指導内容について解説している<sup>2</sup>が、〈道徳〉という言葉の意味には言及していない。

そこで、本論文では〈道徳〉とは何かについて、教育学的視点からではなく、〈道徳〉という言葉の語誌から論じていきたい。〈道徳〉という言葉自体は古代中国に起源を持つのだが、現代の日本社会において我々が〈道徳〉というときには、古代中国語のそれとは差異が生じている可能性がある。それでは、古代中国語で〈道徳〉はどのような意味を持ち、どのように使用されていたのか。それがどのような変遷を経て現代に至ったのか。この経緯を辿ることにより、道徳教育の〈道徳〉の意味の一端を明らかにすることが本論文のねらいである。

1958年（昭和33年）、文部省は戦後民主主義教育の一環として「道徳の時間」を設置する。同年、当時、東京教育大学教授であった原富雄（1898-1983）は、「人間と道徳と教育」<sup>3</sup>という講演で、

1 「文部科学省」ホームページ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/doutoku/](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/)) で閲覧することができる。

2 例えば、「道徳的価値」については、「道徳的価値とは、よりよく生きるために必要とされるものであり、人間としての在り方や生き方の礎となるものである。」（同書第2節「道徳の目標」2(1)）とある。

3 戦後道徳教育文献資料集15『道徳教育実践上の諸問題』（貝塚茂樹・監修 日本図書センター 2004年）の112頁。

「ところでわたくしは、「道徳教育」といったところで、「いったい何をどのように教育しようというのでしょうか」と、まず聞いてみたいものであります。(中略) わたくしども日本人、日本語を話すものがその日常生活のなかで使う道徳ということば、これはモラルとは違うんじゃないでしょうか。」と発言し、これからの日本にとって必要な道徳教育とは何か、現実在即して具体的に考えるべきだと主張している。

それから約60年の時を経て、学習指導要領で教科外活動という位置付けだった「道徳の時間」は、学習指導要領の一部改正によって「特別の教科 道徳」(道徳科)へと格上げされた。その理由の一つとして、「道徳の時間」が有効活用されておらず形骸化している実態があげられているのが、今改正が同じ轍を踏まないためにも〈道徳〉という言葉の意味を明確にする必要があるだろう。

本論文では、最初に〈道徳〉という言葉が使われ始めた古代中国の古典作品を中心に検証していく。

## 一 古代中国における〈道徳〉の展開

### 1 中国思想の二大流派の〈道徳〉—「儒家思想」と「老荘思想」—

古代中国という言い方は漠然としているが、本論文では殷王朝(BC1600?-BC1050?)から後漢(25-220)までの範囲を指すことにする。古代中国の思想といえば、現代日本から数千年を遡った、しかも外国の思想ではあるが、我々と無関係ではない。なぜならば、学校教育では2010-2011年(平成20-21年)改訂の学習指導要領で小学校から漢文を扱うことが明記され、現行の小学校国語科の高学年の教科書は全社(5社)で『論語』が採録されているからである。つまり日本の義務教育では、小学校から国語科の授業で『論語』を学ぶのである。中学校、高等学校では、さらに『老子』『孟子』『荘子』『荀子』等、あらゆる古代中国の思想に触れることになる。

〈道徳〉という言葉も学校教育ではなじみ深い。特に、2015年(平成27年)に正式に教科化が決定し、2018年(平成30年)から小学校で全面实施するに及んで注目度が上がっているといえる。

しかし、この〈道徳〉という言葉が中国起源であることや、漢文の授業で学習している中国の古典作品と結びついていることに対する意識は希薄であろう。〈道徳〉は、古くは『易経』に次のように現れる。

和順於道徳而理於義、窮理盡性以至於命。〔説卦傳 第一章〕<sup>4</sup>

※以下、原文中の太字及び下線は筆者による。

#### 【口語訳】

(占いの卦爻の示すところに従って) 道徳に調和順応して義理に違わぬように心がけ、天下の道理を窮め尽くし、人間の本性を知り尽くしてもって天命を知る境地に至った。

『易経』は周代に大成されたことから『周易』とも、また、単に『易』とも呼ばれる。『易』はもともと占述の書であり儒学との関連性は薄かったが、後漢には儒学の経典である「五経」(『易

4 『易経』下 高田真治・後藤基巳訳 1969年 岩波書店

経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』)の筆頭に挙げられ、重んじられるようになった。その経緯について池田・渡邊(2013)は、「儒家は、秦始皇帝による禁書令の際、実用書として統制を免れていた『易』を取り入れ、儒教的に解釈していくと同時にその権威を高めるために様々な伝説を創出した」<sup>5</sup>と述べている。孔子が『易経』本文の解説編に当たる「十翼」(前掲〔説卦傳〕は「十翼」の一つ)を作ったというのも創出された伝説であるらしい。『史記』〔孔子世家〕には、「孔子晩而喜易、(中略)韋編三絶。(孔子は晩年易を好み、本の綴じ紐が切れるほど繰り返し読んだ。)」との記載があるが、これも伝説の類と考えられている。

元来、占述の書であった『易』を儒教の思想に寄せていったという経緯を踏まえると、前掲〔説卦傳〕は、「卦爻の示すところ<sup>けこう</sup>に従って、「道」と「徳」に和順して義理に違わぬようにする」とも解せる。『易経』において〈道德〉という文字列はここ以外には現れないこともあり、〈道德〉という言葉として熟しておらず、〈道〉と〈徳〉とが並列していると推察できるのである。

『易経』における〈道〉と〈徳〉がどのようなものかを明らかにするのは別の機会に譲り、漢和辞典で〈道〉〈徳〉〈道德〉がそれぞれどのように解説されているかをみると、おおよそ次のようであった。

#### 〈道〉

- ・人が守り行ふべき正しいすじみち。人道。仁義。徳行。(『大漢和辞典』『廣漢字辞典』)
- ・人の行ふべき正しい道。道義。道理。(『廣漢字辞典』)
- ・もと。根元。宇宙の本体。(『大漢和辞典』)
- ・道家で説く、宇宙・万物の根元。現象の本体。(『廣漢字辞典』)

#### 〈徳〉

- ・はたらき。能力。作用。(『大漢和辞典』『廣漢字辞典』)
- ・品性として先天的または後天的に身に得ているもの。品性を向上させるために人の習得すべきもの。道德。(『廣漢字辞典』)

#### 〈道德〉

- ・人の必ずおこなふべき正しい道。人倫五条(仁・義・礼・知・信)をいふ。(『大漢和辞典』)
- ・老子の説いた道と徳。(『大漢和辞典』『廣漢字辞典』)

これらを踏まえると、〈道〉〈徳〉〈道德〉の言葉の意味用法は、孔子を開祖とする儒家的思想の「人の行ふべき正しい道。仁義礼智。」と、老子一派の道家が説く「宇宙・万物の根元。老子の説いた道と徳。」とに大別できる。儒学は中国の数千年の歴史を通じて継承・発展してきた中国思想の一大流派である。その儒家思想と対抗する形で一派を成すのが老荘思想であろう。戸川(2014)は、「中国思想と名づけるものがあるとするれば」と前置きをしながら、「具体的には、儒家思想と、黄老道家から変化した老荘思想との二本のふとい柱がつかぬき、そのあいだにあって伝統的な天下国家観と名分思想が形成され、またその社会に生きる個人と家族の“処世”行為す

5 『中国文化史大事典』 尾崎雄二郎・笹沙雅章・戸川芳郎編 2013年 大修館書店

なわち日常実践の方法が説かれてきた。』<sup>6</sup>と述べている。

そこで、次に、儒家思想的な〈道徳〉と老荘思想的な〈道徳〉を整理して示していくことにする。

## 2 『老子』<sup>7</sup>における〈道〉と〈徳〉

『史記』〔老子列伝〕によると、『老子』は老子が関令の尹喜の求めに応じて与えたと伝えられる書とされている。元來は「老子五千言」「老子書」「上下経」などと呼ばれていたが、〔道経上〕37章と〔徳経下〕44章から構成されていることから「老子道徳経」と称されるようになり、後に『老子』となる。その原形は紀元前4世紀末には成立していたと推定されるが、現行本の成立は漢代である<sup>8</sup>。

「老子道徳経」という呼称に〈道徳〉の文字列が見えることや、孔子の説いた儒学的な「仁義礼智」とは異なる〈道〉と〈徳〉が説かれていることは注目に値する。だが、『老子』全編を通じて〈道徳〉という文字列がどのくらい出現するか調べてみると、本文中には一例も見られなかった。しかし、〈道〉や〈徳〉は頻出している。出現数を集計すると次のようになった。

〈道〉 出現する章の数 37章（全81章中） 延べ出現数63回

主な使用例：天之道（5回）、天道（2回）、天乃道（1回）、天法道（1回）、人之道（2回）  
など

〈徳〉 出現する章の数 16章（全81章中） 延べ出現数40回

主な使用例：上徳、下徳、\*玄德など

\*「玄德」…奥深く隠れた徳。非常に優れた徳。（『廣漢字辞典』）

〈道〉について言及している章は〔道経上〕に限らず全編にわたっており、この傾向は〈徳〉の出現でも同様である。〈道〉は、「天～道」という結びつきでの出現が多く、全部で9例ほど見られた。「人～道」という使用例も2例あったが、これらはいずれも「天～道」と対を成していた。

〈徳〉も前述の通り〔道経上〕〔徳経下〕にかかわらず出現しているのだが、このことは〈道〉と〈徳〉との関係性が深く、双方を切り離しては語れないからだと考える。〈徳〉には、老子の説く〈徳〉を「上徳」とし、それに対比する形で儒家的な〈徳〉を「下徳」として批判する構図がみられる。

次に、〈道〉の使用例を具体的に示しながら検証していきたい。

### 〈道〉の使用例

#### ① 〔第一章〕

道可道非常道。

6 『古代中国の思想』（戸川芳郎 2014年 岩波書店）の202～3頁

7 以下に示す原文及び口語訳は、新釈漢文大系『老子・荘子（上）』（阿部吉雄・山本敏夫・市川安司・遠藤哲夫 1966年 明治書院）を参考にした。

8 前掲の『中国文化大事典』（麥谷邦夫）を参考にした。

## 【口語訳】

(世間一般の人が) これが正しい道だと考えている道は、常に通用する恒常不変の道ではない。

「道の道とすべきは常の道に非ず」は、〔道経上〕の冒頭文である。ここでいう「常の道」とは、具体的には儒家の説く「仁」や「義」などを指している。『老子』は冒頭から儒家批判から始まり、この部分に続いて、「名可名、非常名。(これがこのものをあらわす正しい名だと考えている名は、恒常不変の名ではない。)」と述べており、老子は「常道」も、「名」も、一時的・便宜的なものにすぎないと説いている。

## ②〔第十八章〕

大道廢有仁義。智慧出有大偽。六親不和有孝慈。國家昏亂有忠臣。

## 【口語訳】

大道が廢れると、仁や義がもてはやされるようになる。人間に知恵がついてくると大きないつわりが出てくる。一族(父子兄弟夫婦)が不和になると、親に孝行しろとか子には慈愛の気持ちを持ってと言われるようになる。国家が乱れてくると忠義ぶった臣下が出てくる。

この章は教科書にもよく採られており、「大道廢れて仁義あり」は人口に膾炙している。「大道」すなわち老子のいう「大いなる道」は、ここでは「無為自然」のあるがままの生き方であろう。その「大道」が廢れてしまったからこそ、「仁」や「義」が必要となるのだと、「仁義」を重んじる儒家を批判している。

この後に続く「智慧出でて大偽有り」にも着目したい。知恵がつくといつわりが生じると解釈されるが、この「大偽」とは何を指すのだろうか。ここで想起されるのが、『荀子』〔性惡編第二十六〕の「人之性惡。其善者偽也。(人の本性は悪である。それが善であるならば、人為の結果そうなのである。)」だ。荀子のいう「其の善なるは偽なり」の「偽」とは「為」の仮借で、「人為」、つまり人が努力した結果得たものと考えられる。「智慧出でて大偽有り」と述べている老子は、このような「人為」をも否定しているのだろうか。筆者は、以前、高等学校の国語の授業で『老子』と『荀子』を教えた経験があるが、『老子』における「偽」をどう扱ったらよいか苦慮していた。ほとんどの研究書や指導書等では、「偽」は「いつわり」であるとされていたが、果たしてそうなのだろうか。「人為」の意はないのか。この点は今後の研究課題としたい。

## ③〔第二十三章〕

從事於道者、道者同於道、德者同於德、失者同於失。

## 【口語訳】

道に従事する者は、相手が道を得ている者であれば、その道に同じく従い、相手が徳を得ているものであれば、その徳に同じく従い、相手が徳を失っている者であれば、同じく徳を失った者として振る舞う。



この章では、〈道〉と〈徳〉が同時に出現している。「失者」は文脈上、「徳を失った者」のことだが、『老子』〔第三十八〕に、「失道而後徳、失徳而後仁。（道が失われると徳が説かれるようになり、徳が失われると仁が説かれるようになる。）」とあることから、具体的には「仁」を指すと考えられる。自己主張せずに、どんな相手とも同調する「無為自然」の生き方こそが長久をもたらすということだ。

このような態度は、「和光同塵（自分の才能を隠して、世俗に交じって慎み深く暮らす）」の典故である「和其光、同其塵。（自分の光り輝く才能を和らげて隠し、世間の塵にまみれる）」〔第四章〕にも通じる。

今度は、〈徳〉の使用例について検証していく。

### 〈徳〉の使用例

#### ④〔第三十八章〕

上徳不徳、是以有徳。下徳不失徳、是以無徳。上徳無爲、而無以爲。下徳爲之、而有以爲。（中略）故失道而後徳、失徳而後仁、失仁而後義、失義而後禮。

#### 【口語訳】

上徳の人は自分が徳を行っているなどと意識していない。だから本当に徳がある。下徳の人は、徳を失うまいと意識している。だから徳がないとされるのだ。上徳の人は無為であり、自ら事をなしたという意識を持たない。下徳の人は作為的で、自ら事をなしたという意識を持っている。…中略…それ故、道が失われた後に徳が現れ、徳が失われた後に仁が現れ、仁が失われた後に義が現れ、義が失われた後に礼が現れるのである。

この章は〔徳経下〕の冒頭部である。徳というものは、それを行おうと意識した時から失われる。ましてや礼などという形式的なものは、人が真心を失った結果現れるものだから争乱の始めであると説く。この章でも「仁義礼智」を重んじる儒家に対する批判が繰り広げられている。

#### ⑤〔第六十三章〕

報怨以徳。圖難於其易、為大於其細。天下難事、必作於易。天下大事、必作於細。

#### 【口語訳】

（聖人は）怨みに報いるのに徳をもってする。困難なことは容易なうちに解決を図り、大きなことは些細なことからやる。天下の難事は必ず容易なことから起こり、天下の大事は必ず些細なことから起こるのである。

聖人は事を未然に処理するから、結局、大きなことはしない。だからこそ大仕事を為し遂げるのである。この章で老子は、治世者は人民に対してわざとらしいふるまいをせず、積極的なアピールなどもせずに、「無為自然」であるべきだと主張しているように思われる。その方が、却って政治的効果を得られると老子は言いたいのであろう。

また、老子がこの章で説いている「報怨以徳」に対して、孔子は「以直報怨、以德報徳。（怨

みに対してはまっすぐな正しさで報い、徳に対しては徳をもって報いる」(『論語』憲問篇)と説いている。この点については次項「『論語』における〈道〉と〈徳〉」で検証していくことにする。

### 3 『論語』<sup>9</sup>における〈道〉と〈徳〉

儒家の開祖である孔子と、その弟子の言行録である『論語』は、日本人にとってなじみ深い中国古典作品の一つである。現代では日中を問わず、〈道徳〉といえは孔子の教えを連想する人は少なくないだろう。しかし、実際に『論語』を調べてみると〈道徳〉という言葉は使われていない。そこで、前項『老子』と同様に〈道〉と〈徳〉の出現数を調査してまとめると次のような結果になった。

〈道〉出現する章の数 60章(20篇 499章中) 延べ出現数84回

主な使用例：君子道(3回)、父之道(2回)、\*文武之道(2回)、子之道(1回)、師之道(1回)、夫子之道(1回)、吾道(1回)、古之道(1回)、天道(1回)など  
※「文武」…周の聖王である文王・武王のこと。

〈徳〉出現する章の数 31章(20篇 499章中) 延べ出現数40回

主な使用例：君子之徳(1回)、小人之徳(1回)、周之徳(1回)、報徳(2回)、大徳(1回)、小徳(1回)など

主な使用例をみると、『論語』において〈道〉は「君子」「父」「文武(古の聖王)」「子」等、「人物」、それも孔子が理想としたり、敬意を払ったりするにふさわしい人物と結びついて出現する場合が大半を占める。〈道〉が「天」と結びついている例は「天道」1例のみであった。これは、『老子』における〈道〉の使用例のほとんどが「天～道」で、「人～道」は2例しか出現せず、しかもその2例はいずれも「天～道」と対で使われていたことと対称的といえよう。

〈徳〉の使用例では、「小人之徳」や「小徳」のように〈徳〉が否定的な語と結びついて出現する例も見られるが、「小人之徳」は「君子之徳」の、「小徳」は「大徳」の対比として示されていた。では、次に〈道〉の具体的な使用例を提示しながら検証していくことにしよう。

#### 〈道〉

⑥子貢曰、夫子之文章、可得而聞也。夫子之言性與天道、不可得而聞也。〔公冶篇〕

##### 【口語訳】

子貢が、「先生が文章、すなわち、人の身に現れる徳や、国家の礼楽制度について語られたことは、常に拝見したり拝聴したりできたが、先生が人の性と天道について語られることは極めて稀で、容易に拝聴できない。」と言った。

『論語』に「天道」が出現する唯一の部分である。「天道」とは「宇宙の道理法則」の意と考え

9 以下に示す原文及び口語訳は、新釈漢文大系『論語』(吉田賢抗 1960年 明治書院)を参考にした。



られ、単独で「天」と使用する場合と意味用法に大差はないと推察される。『論語』において「天道」が語られることがほぼ無いのは、孔子が「天道」に対して無関心であったからというよりも、『論語』という書物の性格に因ると考える。『論語』は孔子とその弟子の言行録であり、教義も具体的で実践的に示されている。そのため、「天道」のような抽象論は語られなかったのではないだろうか。これは『老子』という書が、「固有名詞のまったくない、警句と格言風の断片でつづられているが、対偶と韻文の文体で、内容は意表をつく巧みな逆説的表現」<sup>10</sup>をとっていることと対称的である。

同時に、『論語』は主として人倫道徳を説く目的で著された書であるからこそ、君子や聖王といった理想の人物と結びつき、「人の道」を説いているのだともいえる。

なお、ここでの「文章」とは、「文（かざる）章（あきらか）」、つまり「文彩」の意で、徳が言辞に明らかにあらわれ、「人の言動が立派になり、国家社会の秩序が保たれて、美しい世の中になること」<sup>11</sup>を意味している。

⑦子曰、君子道者三。我無能焉。仁者不憂、知者不惑、勇者不懼。〔憲問〕

【口語訳】

孔子が、「君子の道というものが三つあるが、私にはできない。仁の人は心配がない、知の人は惑わない、勇の人は懼れない。」と言った。

孔子が「君子の道」とは何かについて具体的に語った章段である。これに続く部分で弟子の子貢は、「夫子自道也。（先生は自分のことをいわれたのだ。）」と述べて、これは孔子の謙遜であると説明している。だが、孔子は真摯に自分を見つめ、まだまだ至らない人間だと考えていたのかもしれない。

⑧子之武城、聞弦歌之聲。夫子莞爾而笑曰、割雞焉用牛刀。子游對曰、昔者偃也、聞諸夫子。曰、君子學道則愛人、小人學道則易使也。子曰、二三子、偃之言是也。前言戲之耳。〔陽貨篇〕

【口語訳】

孔子が、（子游が治めている）武城の町に行ったとき、琴の音と雅楽の歌声が聞こえた。にっこりと笑って、「鶏を料理するのに牛刀は必要なのか。（もったいないではないか。）」と言った。子游は、「むかし私は先生から、「君子が道を学べば人を愛するようになり、小人が道を学ぶと使いやすくなるものだ」とうかがいました。」と申し上げた。孔子は、「諸君、偃（子游の名）のことが正しい。先程のは冗談だよ。」と言った。

この章段は「鶏頭牛後」の典拠として知られている。ここにも〈道〉が出現しており、「君子」と「小人」にとって〈道〉がどのように作用するかを対比的に示しているのであげておく。

10 『古代中国の思想』（戸川芳郎 2014年 岩波書店）の48頁。

11 新釈漢文大系『論語』（吉田賢抗 1960年 明治書院）の111頁。

## ⑨子曰、朝聞道、夕死可矣。〔里仁篇〕

## 【口語訳】

朝に（人が行わなくてはならない）道を知ることができたら、その晩に死んでも満足すべきだろう。

〈道〉を聞いて、それを体得することができたら死んでも思い残すことはないというのであるから、孔子にとって〈道〉こそ理想の生き方で、その〈道〉を行うことが人生最大の目的であったのだろう。

それでは、次に、〈徳〉の具体的な使用例を示しながら意味内容を検証していきたい。

## 〈徳〉

## ⑩子曰、為政以德、譬如北辰居其所而衆星共之。〔為政〕

## 【口語訳】

孔子が、「政治をするのに徳をもってすれば、ちょうど北極星が自分の場所において、多くの星がその方向に向かって取りまいているようなものだ。」と言った。

〈徳〉は君子と結びつくことが多い。君子の人徳で天下を治め、人民を教化するという孔子の理想がよく表れている。

## ⑪子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥。道之以徳、齊之以禮、有恥且格。〔為政篇〕

## 【口語訳】

孔子が、「政治（法制禁令など）で導き、刑罰で統制していくなら、人民は刑罰を免れさえすればよしとして恥づかしいとも思わないが、徳で導き、礼儀で統制していくなら、人民は恥を知って正しくなる。」と言った。

この⑪も、徳治政治を説いた孔子の政治理念が示されている。

## ⑫或曰、以德報怨、何如。子曰、何以報徳。以直報怨、以德報徳。〔憲問篇〕

## 【口語訳】

ある人が、「人からしかけられた怨みに対して徳（恩徳）で報いたら、いかがでしょう。」と言った。孔子は、「怨みに対して徳をもって報いたとしたら、徳（恩徳）に対しては何をもって報いたらよいだろうか。怨みに対しては、まっすぐな正しさ（公平無私）で報い、徳（恩徳）に対しては、徳をもって報いるのがあたりまえだ。」と答えた。

この章段は、『老子』の使用例⑤と比較しながら検証していきたい。老子と孔子が、それぞれ「怨」に対してどのように報いるのがよいと主張しているのか、整理すると次のようになる。

老子…「報怨以德（怨みに報いるのに徳をもってする）」

互いに報復を繰り返しては、争いごとは解決しない。

孔子…「以直報怨、以德報徳。（公正な態度で怨みに報い、徳には徳で報いる）」

礼に照らして判断する。無条件に相手を認めることはしない。

老子は、自分から一步譲って禍根を断つという対処法を主張する。これは「無私」（自分を主張せず争わない生き方）や「玄同」（きらびやかな知恵は、ほんやりと和らげ、世俗と身を同じくする）とも通じている。一方、孔子の対処法は何事もきちんと「すじみちをたてる」ことを重んじている。これは、「君子和而不同（君子は人と調和するがむやみに同調しない。）」〔子路篇〕と通じる。

### 3 『史記』<sup>12</sup>における〈道徳〉

老子に関する最古の伝記資料は、前漢の司馬遷（前145?-前86?）の著した『史記』〔老子列伝〕である<sup>13</sup>。また、『史記』では、諸侯の家系を中心に国の歴史を記した「世家」に、〔孔子世家〕をおさめている。言うまでもなく孔子は諸侯ではないので、これは異例の扱いとされている。

そこで本項では、司馬遷が老子と孔子を記す中で、〈道徳〉がどのように使用されているかをみていくことにする。

〔老子列伝〕と〔孔子世家〕において〈道徳〉という文字列が現れるのは、次の二例であった。

#### ⑬〔老子韓非子列伝第三〕

孔子去、謂弟子曰、（中略）吾今日見老子、其猶龍邪。老子脩道徳、其學以自隱無名為務。（中略）關令尹喜曰、子將隱矣。彊為我著書。於是老子迺著書上下篇、言道徳之意五千餘言而去。

#### 【口語訳】

孔子は去って弟子に言った。「…中略…私は今日、老子に会ったが、老子というのはまるで龍のようだ。（私にははかり知れない。）」と。老子は、道と徳というものを修めた。その学説は、身を隠して世にあらわれないことを中心にするものであった。…中略…関令尹喜が、「あなたは身を隠そうとしている。最後の機会に、無理にお願いしたいのだが、私のために書物を書いてほしい。」と言った。そこで老子は上下篇の書を著すことになり、道と徳の本意を記す五千余字を残して去った。

ここで、司馬遷は「老子脩道徳」と記しているが、これは老子一派のいう〈道徳〉、つまり〈道〉と〈徳〉であって、儒家的な「人としてあるべき正しい道」というような意味ではない。また、「道徳之意五千」とは『老子（道徳経）』のことである。なお、〔孔子世家〕にもこの⑬と同じ場面の

12 以下に示す原文及び口語訳は、新釈漢文大系『史記(世家中)』（吉田賢抗 1979年 明治書院）等を参考にした。

13 前掲の『中国文化大事典』（麥谷邦夫）による。

記述があるが、〈道徳〉という文字列の出現はない。

⑭〔老子韓非子列伝第三〕

太史公曰、老子所貴道、虚無、因應變化於無為、故著書辭稱微妙難識。莊子散道徳、放論、要亦歸之自然。(中略)韓子引繩墨、切事情、明是非、其極慘礪少恩。皆原於道徳之意、而老子深遠矣。

【口語訳】

太史公曰く、「老子が貴んだのは道である。虚無であるからすべてに対処でき、無為において変化自在だからである。その著書の示すところは、微妙で知り難い。莊子は（老子が説いた）道と徳を一層広め、気ままに論じた。その要点はやはり自然ということに帰着する。…中略…韓非子は法律の縄を張りめぐらし、心情を適切に捉え、是と非を明らかにした。その説がきわめて恩情に欠けているのもすべて（老子の）道と徳の意に基づくので、老子は深遠なのである。」と。

⑭の部分では、老子の〈道〉と〈徳〉が莊子によってさらに広げられたことや、韓非子の法家思想に影響を与えたことが述べられている。その中で司馬遷は、老子の思想を「深遠」だとして評価している。

その他にも、『史記』の中には〈道徳〉の使用例が15箇所ほど出現するが、その中には、いにしへの聖王の〈道徳〉について記しているものがあるので、代表的なものを一つあげておきたい。

⑮〔楚世家第十〕

楚人有好以弱弓微繳加歸鴈之上者、頃襄王聞、召而問之。對曰、小臣之好射騏鴈、羅鷺、小矢之發也、何足為大王道也。且稱楚之大、因大王之賢、所弋非直此也。昔者三王以弋道徳、五霸以弋戰國。

【口語訳】

楚人に巧みに弱い弓と細い糸をつけた<sup>いぐるみ</sup>弋（鳥をからめて射落とすためのしかけ）の矢で、北へ帰る雁を射落とす者がいた。<sup>けいじょうおう</sup>頃襄王はその噂を聞いて、その人を召して射法を問うた。その人は答えて、「わたくしがよく小雁や野鳥を射ますのは、小さな矢を射るだけのことです。わざわざ大王に申し上げるほどのことではございません。それはともかく、楚ほどの大国の力で、大王の賢明さをもってすれば、射止めるのはこのような小物ではありません。昔の三王は、道徳をいぐるみの矢で射止めて天下を取り、五覇は戦国の世をいぐるみの矢で射止めて諸侯を従えました。」と言った。

「昔者三王」とは「夏・殷・周三代の始祖の王」<sup>14</sup>を指す。すなわち夏の禹・殷の湯王・周の武王のことである。「昔の三王、以て道徳を<sup>よく</sup>弋し」とは、古代の聖王が〈道徳〉を身につけていた

14 前掲『史記六(世家中)』の479～480頁。

ことの比喩である。これは、〈道徳〉という言葉が儒家の理想とする、人のあるべき生き方を表していることがわかる例といえよう。

#### 4 『礼記』<sup>15</sup>における〈道徳〉

『礼記』は『易経』『書経』『詩経』『春秋』とともに「五経」に列せられ、儒学の経典として尊重されてきた。その成立年代は定かではないが、先秦以来の礼の議論が取り込まれて成立していると考えられており、今日のような49篇の体裁にまとめ上げたのは前漢の戴聖（生没年不詳）だとされている。これは本論文が扱う時代範疇であるので、『礼記』における〈道徳〉の使用例についても検証しておく。

『礼記』で〈道徳〉が出現するのは、次の2例である。

##### ⑩〔曲禮上第一〕

**道徳仁義、非禮不成。教訓正俗、非禮不備。**

【口語訳】

道徳仁義は礼なしには実現されない。人民を教化し俗を正すのも、礼なくしてはうまくいかない。

ここでは、〈道徳〉と「仁義」とが結びつき、倫理道徳という意味合いで使われている。礼の精神と意義について説き、平和な生活に礼は不可欠なものとしている。

##### ⑪〔王制第五〕

司徒修六禮以節民性、明七教以興民徳、齊八政以防淫、一**道徳**以同俗。

【口語訳】

司徒は六礼（冠礼・婚礼・喪礼・祭礼・郷礼・士相見礼）を心得て、これを教えて人民の性情を極端に走らないように調節し、また七教（父子・兄弟・夫婦・君臣・長幼・朋友・賓主に関する教訓）を明示して、人民の親切心を興し、八政（衣食その他八種類の物に対する規則）を定めて、人民の生活の乱れを防ぎ、**行為の基準**を一つにして善悪が同じものとなるように導かなくてはならない。

ここでの〈道徳〉は、〔曲礼〕の使用例とは異なり、「行為の基準」と解されている。しかし、行為の基準が「生活を維持してゆく根本的な立場とか、生活方針とかをさす」<sup>16</sup>という点では、〔曲礼〕の倫理道徳観と共通している。

15 以下に示す原文及び口語訳は、新釈漢文大系『礼記(上)』（竹内照夫 1971年 明治書院）を参考にした。

16 前掲『礼記(上)』の207頁。

## 二 日本における〈道徳〉の展開

本章では、中国から流入した漢語である〈道徳〉が、日本においてどのような変遷を辿ったかを概観する。まず、現在、日本語では〈道徳〉という言葉をどのように捉えているのか。国語辞典を調べてみると次のようにある。

○人間がそれに従って行為すべき正当な原理（道）と、その原理に従って行為できるように育成された人間の習慣（徳）。はじめ慣習、風習、習俗の中に現われるが、人間の批判的な自覚の高まりとともに、慣習や習俗を批判し反省しながら、慣習から分化した精神的規範や規準として現われる。（『日本国語大辞典』小学館（ジャパンナレッジLIB））

○人のふみ行うべき道。ある社会で、その成員の社会に対する、あるいは成員相互間の行為の善悪を判断する基準として一般に承認されている規範の総体。

（『広辞苑』（第6版）2008年岩波書店）

○社会生活の秩序を成り立たせるために、個人が守るべき規範。

（『明鏡国語辞典』2006年大修館）

上記をみると、「人のふみ行うべき道」というような儒家的なものや、「社会の成員として守るべき規範」といった説明がされている。

次に、このような意味を持つまでの経緯を時代を遡って古い順に概観していきたい。

### 1 〈道徳〉の使用例の変遷

『日本国語大辞典』の「語誌」によると、最古の出典は六国史の一つ『続日本紀』<sup>17</sup>（697-791）である。その慶雲三年（706年）に次のような記述がある。

○道徳仁義因禮乃弘、教訓正俗、待禮而成。〔三月丁巳〕

道徳仁義は礼に因りて弘まり、教訓正俗は、禮を待ちて成る。

この記述は前掲<sup>16</sup>『禮記』〔曲禮上第一〕の「道徳仁義、非禮不成。」から引用したものであろう。

次に、鎌倉時代の歴史書である『吾妻鏡』<sup>18</sup>（1180-1266）の使用例をあげる。延応元年（1239年）の記事である。

○道徳為胃、仁義為劔。〔八月十九日〕

道徳を胃と為し、仁義を劔と為す。

17 国史大系第2『続日本紀』1897-1901 経済雑誌社 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

18 国文学研究資料館『吾妻鏡』データベース



〈道徳〉と「仁義」が対を成して使用されている。儒家の倫理道徳観は漢文を扱える階層には知られていたのだろう。

続いて、江戸時代の使用例をあげる。江戸期は学問といえばそれは漢学を指し、儒者による中国古典研究が盛んに行われていた。本論文では中国古代を中心に論じているので、古義学（宋代の朱子注に依らずに孔子・孟子の道を研究する）を提唱した伊藤仁斎（1627-1705）の『語孟字義』<sup>19</sup>（宝永元年（1704年））の使用例をみていく。

以下に、主な使用例を二点示す。

○〔徳〕第三條

道徳二字、亦甚近相。道以流－行言。徳以所存言。道有所自－導。徳有所物濟。

【口語訳】

道と徳の二字の意義は、非常に似ている。道とはものの流行・交通の在り方をいう。徳とはものの存在・維持の在り方をいう。また道は自ずから導くところがある。徳にはものを成就させるところがある<sup>20</sup>。

○〔仁義禮智〕第三條

仁義禮智四者、皆道徳之名、而非性之名。道徳、以徧達於天下而言。非天下之所該也。此性與道一徳ノ辨也。

【口語訳】

仁義礼智の四者はみな道徳の概念であって、性の概念ではない。道徳とは遍く天下にいきわたることをもっていうのである。それは一人の有するものではない。それに対して、性とはもっぱら己の有するものとしていうのである。天下が広く備えるものではない。これが性と道徳との弁別である。

本論文で検証したように『論語』には〈道徳〉の文字列は出現していなかった。これは『孟子』も同様である。しかし、仁斎は〔仁義礼智〕の第三條では、〈道徳〉という言葉を用いてその概念を論じている。『続日本紀』などでは、単に中国の古典を引用していたにすぎない使用例もあったが、仁斎はじめ江戸時代の儒家は〈道徳〉という言葉を使駆して自分の思考を展開し、論を深めていたと言えよう。

## 2 明治期の〈道徳〉—翻訳語としての〈道徳〉—

明治期になると、開国にともなって日本は社会・言語・文化・文学・思想などあらゆる方面で変貌を遂げる。特に言語分野では、それまでほぼ和語と漢語（その他、オランダ語等もあったが）で成り立っていた日本語が、欧米諸国の言語と出会うことになる。

19 以下に示す原文は、『伊藤仁斎 伊藤東涯』（日本思想体系33 吉川幸次郎・清水茂 校注 1971年 岩波書店）によった。

20 口語訳と解説は、『仁斎学講義-『語孟字義』を読む』（子安宣邦 2015年 ペリカン社）を参考にした。

本項では、このような時代背景の中で、〈道德〉はどのように使用されていたかを検証していく。まず、明治期に編まれた「和英辞典」や「哲学事典」等の辞書類での扱いをみていきたい。

- 『和英語林集成』<sup>21</sup>初版 平文（ヘボン）編訳 1872年（明治5年）  
「Dō-RI, ダウリ, 道理」は、「Reason, right, principle, truth, principles, doctrine」などがあるが〈道德〉は立項されていない。
- 『改正増補和英和語林集成』<sup>22</sup>第3版 平文（ヘボン）編訳 1886年（明治19年）  
「DōTOKU ドウドク 道德」は、「Morality :—gaku, moral science」とある。  
この第3版では、初版（1872年）にはなかった〈道德〉が立項された。なお、「修身」は立項されていない。
- 『哲学字彙』<sup>23</sup>井上哲次郎・有賀長雄  
1881年（明治14年）の初版では「Morality」は「行状、道義」と訳されている。1884年（明治17年）の『改訂増補哲学字彙』も同様であるが、1912年（明治45年）の第3版『英独仏和哲学字彙』では「Morality」の訳語として「行状、品行、道義、倫理、道德」があげられている。

次に、明治初期の学術啓蒙雑誌である『明六雑誌』（1874-1875年（明治4-5年）・明六社）における〈道德〉の使用例を検証する。『明六雑誌』は、西周（1829-1897）、中村正直（1832-1891）、福沢諭吉（1835-1901）らが欧米諸国の思想を紹介したもので、明治初期の漢語や翻訳語の使用状況を知るための貴重な資料でもある。

本項では、「明六雑誌コーパス」<sup>24</sup>を用いて検索を試みた。その結果、〈道德〉は32件検出され、そのうち29件は西周の記事で、残りの3件は西村茂樹（1822-1881）であった。

次に西周の主な使用例をみていきたい。

#### 〈西周の使用例〉

- 「愛敵論」第17号 1874年（明治7年）9月  
爾ニ敵スル者ハ之ヲ愛セヨ。此一訣遽ニ之ヲ見レバ驚クベキガ如ク怪シムベキガ如シ。  
（中略）人苟モ上天ノ意ヲ禮セント欲スル者、之ヲ以テ道德至極至高ノ則トスベシ。
- 「人世三寶説一」第38号 1875年（明治8年）6月4日  
歐洲哲學上道德ノ論ハ、古昔ヨリ種々ノ變化ヲ歴テ、今日ニ至リ、近時道德論上ノ一大變革ナリト見ユ。

21 国立国会図書館近代デジタルライブラリーより

22 国立国会図書館近代デジタルライブラリーより

23 『哲学字彙』『改訂増補哲学字彙』『英独仏和哲学字彙』井上哲次郎・有賀長雄 1980年 名著普及会

24 国立国語研究所が2012年から公開している。『明六雑誌』全号の全文を対象（総語数訳18万語、16人の著者）とする。

西は「人世三寶説一」で〈道徳〉に〈モラル〉と振り仮名を施し、〈moral〉の訳語に〈道徳〉をあてている。

では、明治初期には〈moral〉の訳語として〈道徳〉が定着していたのだろうか。そこで、『明六雑誌』のその他の用例をみると、次のようであった。

- 阪谷素（1822-1881）「転換蝶鉢」第38号・2  
微忿壑欲、遷善改過ノ勇ナル、一身ノモラルナリ

阪谷は、〈moral〉を〈モラル〉とカタカナであらわしている。

- 中村正直 「善良ナル母ヲ造ル説」第33号・1  
余前ニ人民ノ性質ヲ改造スル説ヲ演ベ、モラル・レリヂス・エヂューケーション（修身オヨビ敬神ノ教育）、アートサイエンス（技術オヨビ学術ノ教育）、コノ二大分ノ教育ニヨラザレバ、人民ノ心ヲ一新シ高等ノ度ニ進マシムル能ワザルコトヲ説クナリ

中村は、〈moral〉を〈修身〉と訳している。以上の用例から、明治初期の段階では〈moral〉の翻訳語として〈道徳〉が定着していたとは言い難い。

1893年（明治26年）に西村茂樹が著した『徳学講義』<sup>25</sup>には次のようにある。

按ズルニ今世間ニテ言フ所ノ道徳ト云ヘル語ハ、支那ノ儒教ヨリ來レル語ニ非ズシテ、西洋ノ翻譯語ヨリ來レル者ナリ。希臘ニエシックスノ語アリ、拉丁ニMoralノ語アリ。現今法英ノ国ニモ亦Moralノ語アリ。

ここで西村は、今世間で言われている〈道徳〉という語は、中国の儒教に由来しているのではなく、ギリシャ語の〈エシックス〉、ラテン語の〈moral〉、仏語・英語の〈moral〉といった西洋語の翻訳語であると述べている。したがって明治後期頃から、〈道徳〉という言葉は〈moral〉の翻訳語として西洋の倫理観とともに日本社会に定着していったと推察される。

### 3 明治期以降の道徳教育

次に、明治期の教育制度において道徳教育がどのように行われていたかを検証していく。日本の教育の近代化は1872年（明治5年）8月3日の「学制」発布に始まる。同年9月3日に文部省は「小学教則」を布達し、小学校の教科、教授方法、授業時間数、教科書等を明らかにする。その教科の一つに「修身」が見られる。

25 『徳学講義』 西村茂樹 1895-1901年 哲学書院 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

○「小學教則」9月6日文部省布達番外<sup>26</sup>

第八級

ギョウギノサトシ

「修身口授」一週二字（即チ二日置キニ一字）週2時間

民家蒙解 童蒙教草等ヲ以テ教師口ヅカラ縷々之ヲ説論ス

「第八級」とは、一番初等のクラスのことで、最年少は六歳の児童が学ぶ。「一週二字（即チ二日置キニ一字）とあるのは、授業時数が「週2時間、つまり2日おきに1時間」という意味である。

「修身口授」には、「ギョウギノサトシ」と振り仮名が振ってある。この「修身」という言葉の典拠は『礼記』[大学]の「心正而后身修，身修而后家齊，家齊而后國治，國治而后天下平。（まず自分の身を修め、次に家庭をととのえ、次に国を治め、次に天下を平らかにする）」である。これは儒学の基本的な政治観を示しているのだが、当時の文部省はこの〈修身〉を科目名として採用している。

また、この時期、文部省は「修身」の教科書を作成しておらず、使用すべき教材として、青木輔清訳の『民家蒙解』（1874年（明治7年））と福沢諭吉訳の『童蒙教草』（1872年（明治5年））をあげている。これらの翻訳書は、必ずしも儒教道徳を教えようとするものではなかった。

参考までに中国の近代道徳教育に言及しておく。1902年に「欽定学堂章程」を定めるのだが、この小学の科目に「修身」や「読経」等が見られる。これについて山田（2012）は、「日本の近代教育の影響をうけた1902年欽定学堂章程では、修身は独立した週6時間の筆頭教科で、別に読経、史学、輿地が科目としてあった」<sup>27</sup>と述べている。この時、教科名として使われた「修身」などは日本から「逆輸入」された漢語であると考えられる。

日本において「修身科」が全国的な広がりを見るのは、1890年（明治23年）に「教育勅語」が渙発された後である。文部省は、それまで「修身科」は「口授」で行うものとしてきたが「教育勅語」の渙発を契機に、国定教科書による道徳教育を開始する。全ての国定教科書の冒頭には「教育勅語」が載せられ、暗唱することが求められていた。

筆者は最近、昭和10年代に「修身科」の授業を受けた経験がある知人から話を聞く機会を得た。それによると、当時の子どもは、家庭でも家人の前で「教育勅語」を暗記してみせたという。意味はよくわからなかったが、声に出したときの調子が心地よく、友人と競って暗記したらしい。また当時、男子の名前で「修身（おさみ）」が流行したことを覚えているとのことだった。

道徳教育がこのような経過を辿る中、〈道徳〉という言葉自体はどのような捉え方をされていたのか。1933年（昭和8年）に刊行された『大言海』<sup>28</sup>には次のようにある。

ヒトノミチ。人ノ世ニ處スルニ、履ミ行フベキ行爲ノ規範。人トシテ、カクアルベシト云フ

26 『文部省布達全書』明治4年、5年 文部省出版 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

27 山田美香「中国における道徳教育と社会科との合科」『名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究』17号 2012年

28 『大言海』大槻文彦 1933年 富山房

意識、即チ本務意識ヲ原因トシテ成シ遂ゲラルベキ行爲。又、人ガ社會ノ中ニ生活シテ、己レガ位地境遇ニ應ジテ成シ遂ゲベキ行爲。人道。道義。徳義。

この記述は、前掲『広辞苑』の説明とほぼ同じである。

一方、本論文の「一 古代中国における〈道徳〉の展開」で検証してきた古典作品、特に儒学に関する作品の扱いに目を向けると、明治後半から昭和前期にかけて、学問的な議論からかけ離れた位置に置かれていた。この点について市來津（2014）は、「士大夫文化性を後退させた中国古典世界は、明治の後半以降、江戸の漢学の延長での近代的教養化、「国民道徳」への言葉の提供、士大夫文化の外部に立つ視線といった方向に分解しつつ、昭和前期にはこのうちの「国民道徳」論の視線が全面にでるようになるという経過をたどった」<sup>29</sup>と指摘している。儒教倫理に関する言葉が恣意的で偏った扱いの下、「国民道徳」の普及に利用されたのである。

#### 4 戦後の道徳教育と教科化に対する課題

第2次世界大戦後「修身科」は廃止され、新しい民主主義教育に資するための道徳教育の確立が急務となる。「修身科」の反省を生かし、1958年（昭和33年）から教科外活動「道徳の時間」が設置された。この時、〈道徳〉という言葉が採用されたのだが、本論文「はじめに」で言及した原は、同講演「人間と道徳と教育」で、「道徳、道徳とひごろなれ親しんでいる日本語で話す場合ですが、倫理というよりも道徳というほうがことばとしてもまた日本語としても熟していると思います。」<sup>30</sup>と述べている。このことから、戦後の日本社会において、〈道徳〉という言葉は日常生活に浸透していたことがわかる。

2015年（平成27年）、学習指導要領が一部改正されて「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」（「道徳科」となることが決定し、2018年（平成30年）には小学校から順次全面实施される。これにより文部科学省の検定を受けた教科書を使用する等して、学習内容の一層の充実を目指す。「道徳科」の教科目標に掲げた「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ために、どのような教材を用いて、どのような指導をするのか。本論文はこのような問題提起から始まり、〈道徳〉の語誌を概観する中で、〈道徳〉という言葉の多様性を再確認した。〈道徳〉は、古代中国の「儒家思想」と「老荘思想」のそれぞれの〈道〉や〈徳〉に対する概念に端を発し、漢代頃には儒家的な倫理道徳観を表す言葉として確立した。日本に流入後は、江戸期に伊藤仁斎らの儒者によって、朱子学とは異なる道徳観を再構築する。さらに明治期には〈moral〉の翻訳語となり、西洋的な道徳観をも取り込んだ。戦後は新しい民主主義的倫理観も加わり、現代の〈道徳〉に至る。このような多様性ゆえに、「道徳科」では、自由かつ柔軟に学習活動が行えるともいえる。道徳教育は今後しばらく試行錯誤が続くと予想されるが、特定の価値観に偏ることなく、常に多角的な視点を持つ姿勢は堅持しなくてはならない。

29 東アジア海域に漕ぎだす5『訓読から見直す東アジア』（中村春作編・小島毅監修 2014年 東京大学出版会）の304頁。

30 前掲 戦後道徳教育文献資料集15『道徳教育実践上の諸問題』

### おわりに

本論文では〈道德〉の語誌について、漢代までの中国古典作品を中心に検証してきたが、今後は唐代以降にも目を向けていきたい。特に唐代の韓愈（768-824）が著した「原道」の研究は、儒家の道德の根源・本質を原（たず）ねる上で不可欠であると考えている。また、宋代のいわゆる新儒学において〈道德〉がどのように解釈されたか、また、それが江戸期の儒家にどのような影響を与えたかも研究する必要があるだろう。なぜならば、これらは現代の〈道德〉との繋がりを解明する際に重要なテーマとなるからだ。

道德の特別教科化にあたり、現在、教育学や心理学等の観点から道德教育へアプローチする研究が盛んに行われているが、〈道德〉という言葉自体を解明する観点からも道德教育の可能性を広げていきたいと考えている。